

伊勢崎市下田遺跡出土石皿および 太田市大道東遺跡出土石製品の再検討

田 村 博

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 伊勢崎市下田遺跡 I 区 3 号住居跡出土石皿(Na.15)
2. 太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品(Na.560)

3. 分類

4. 類似する石製品
- おわりに

— 要 旨 —

伊勢崎市(旧佐波郡東村)下田遺跡 I 区 3 号住居跡出土石皿(Na.15)は、発掘調査報告書(小林徹2008)において「特異な石皿」とされながらも、これまで注目を浴びることが少ない遺物であった。しかし、このような皿類(田村2013a・2014)に分類される石皿は、関東地方では出土例が極々稀である。そこで、類例であり発掘調査報告書(岩崎(編) 2009)において検討されたことのある太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品(Na.560)と比較し、その再検討を行うものである。その結果、下田遺跡 I 区 3 号住居跡出土石皿(Na.15)および大道東遺跡遺物包含層出土石製品(Na.560)ともに縄文時代中期末から後期初頭の石皿であり皿類に分類され、秋田県由利本荘市(旧由利郡東由利町)三升刈遺跡出土ホト形石製品との対比から女性(女性器)を示すものである可能性が指摘された。

キーワード

対象時代 縄文時代
対象地域 群馬県伊勢崎市・太田市
研究対象 石皿、石製品

はじめに

かつて筆者は石皿の形態分類(I～Ⅲ類)および時期的変遷について論じ、その中で所謂「中高石皿」に代表されるⅢ類について関東地方には見られないとした(田村2000・2001・2010・2013a・2014)^(註1)。本稿にて扱う伊勢崎市(旧佐波郡東村)下田遺跡Ⅰ区3号住居跡出土石皿(№15)(小林徹2008)は、そのⅢ類の関東地方における極めて稀な出土例であり、筆者はその存在に気付き石皿の変遷観を一部改めた(田村2014)。しかし、発掘調査報告書刊行後約9年を経た現在、未だに研究の俎上に上ることは稀である。よって、本稿においては、形態の類似する太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品(№560)(岩崎(編)2009)と比較しその再検討を行い、その縄文時代における位置づけを主に心理的・観念的領域で機能する「第二の道具」(小林達1977)としての側面から考える第一歩とするものである^(註2)。

1. 伊勢崎市下田遺跡Ⅰ区3号住居跡出土石皿(№15)

①遺跡の概要

伊勢崎市(旧佐波郡東村)下田遺跡は伊勢崎市田部井町の早川左岸の谷底平野に立地する。標高約77mの平坦地である。対岸の右岸側は大間々扇状地桐原面の東端で、標高が左岸側より約2m高く、下元屋敷遺跡が所在する。

下田遺跡からは、北関東自動車道関連の発掘調査により、縄文時代の住居70軒・掘立柱建物3棟・配石22基・埋甕17基・集石7基・土坑1139基・柱穴45基・遺物集中部1箇所、古代の住居1軒・溝39条・水田2面・畠1面・土坑1基・鉄滓散布地1箇所、中近世の水田1面・溝97条・土坑24基が確認されている。

下田遺跡の縄文時代の遺構は、東を旧河道、西を早川により区切られた微高地に集中している。中期後半(加曽利EⅠ式)から後期前半(堀之内2式)にかけての時期に比定される。また、僅かではあるが中期中葉以前や後期後半の土器も出土し、晩期(大洞C2式)の土器も1点出土している。(小林徹2008)

②石皿出土遺構の概要

では、当該石皿の出土したⅠ区3号住居跡について、発掘調査報告書はどのように記載しているかを確認することとする。少し長くなるが、関連箇所を引用する^(註3)。なお、文中に「石皿(15)」とあるのが当該石皿である。

○Ⅰ区のほぼ中央部(040～047, -914～-918)グリッド付近に位置する。壁面の立ち上がりや壁周溝は確認できなかったが、柱穴の位置や上層の遺物分布状況などから、平面形は柄鏡形で、主体部は直径5m程の円形と推定される。主軸方向はN-34°-Wである。柄部に敷石はなく、幅は不明である。先端部と連結部で

埋甕を検出した。両者の距離は2.2m程で、柄部の長さはこれに準ずると思われる。しかし、後述するように先端部の埋甕は主体部出土の土器より古く、若干の時期差が認められるため、これを単独の埋甕ととらえることもできる。そうすれば柄部の短い柄鏡形か円形の主体部のみとなる。

床面はほぼ平坦で、硬化面は認められなかった。主体部南半では扁平な礫が数点見られ、敷石を施していたと思われる。

また、住居中央部に石囲い炉の残骸にも見える礫の分布があったが、炉と認定するには至らず、炉の位置は確定していない。

主体部推定範囲付近からはピットが13本検出された。いずれもほぼ円形で比較的深く、P7とP8が連結部対ピットに、P1～6およびP9、P10が壁柱穴に相当する。P13については、本住居に帰属するか検討の余地がある。…

遺物は、柄部先端の1号埋甕は加曽利EⅣ式であり、連結部の2号埋甕は称名寺[1]式である。主体部からは中期後半(加曽利EⅡ～Ⅳ式)の土器の出土がやや多い。石器では、連結部から特異な石皿(15)が出土している。

時期は、主体部出土の埋甕等から、縄文時代中期後半から後期初頭(加曽利EⅣ式～称名寺[1]式)に位置づけられる。(小林徹2008、pp.9-10)

以上、遺構の残存状況は良好とはいえない。本遺構の平面形状および時期は、1号埋甕の帰属によって、柄鏡形で加曽利EⅣ式期、もしくは柄部の短い柄鏡形か円形で称名寺1式期の可能性が指摘されている。なお、出土遺物については中期後半から後期初頭にかけての土器11点と石器4点が図示されている。

③石皿(№15)の概要

Ⅰ区3号住居跡からは、剥片5点・加工痕のある剥片1点・多孔石1点・凹石1点・敲石1点・石皿1点の計10点の石器が出土している。そのうち、図示されているのは剥片以外の多孔石1点・凹石1点・敲石1点・石皿1点と、すべて礫石器である。

当該石皿は、発掘調査報告書によると、3号住居跡の柄部連結部付近から出土した「特異な石皿」(小林徹2008、pp.10)であり、遺物観察表には、粗粒輝石安山岩製、最大長29.6cm、最大幅29.0cm、最大厚8.8cm、重量8,280gとあり、特記事項はない。以上が発掘調査報告書の記述内容の全てである。そこで、改めて観察してみることとする。

まず、作業面に注目すると、浅く凹みゆるやかに立ち上がる縁を持ち、2つの島状の高まりが中央部に長軸方



図1 下田遺跡Ⅰ区3号住居跡出土石皿(No.15) (小林徹2008を一部加工)

向に連なっている。また、欠損品であるため確証はないが、欠損部付近に縁の僅かに途切れる箇所があり、掃き出し口が形成されていた可能性が考えられる。裏面に目を転じると、4箇所の凹み加工が長軸中心線に沿うように連なり、多孔石状となっている。文様および脚の形成は見られない。

以上のことから、当該石皿は裏面に多孔石状の加工のある皿類であり、掃き出し口をもつ可能性があると考えられる。また、太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品(No.560)との類似が指摘される(岩崎(編)2009、pp.167-168)。次に、この太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品(No.560)について見てみることにする。

2. 太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品(No.560)

①遺跡の概要

太田市大道東遺跡は、群馬・栃木県境に近い太田市東今泉町の渡良瀬川扇状地に立地する。標高は約52mである。

大道東遺跡からは、縄文時代の竪穴住居12軒・土坑93基、古墳時代後期～平安時代の竪穴住居297軒・掘立柱建物23棟・溝17条・集石遺構8基・土坑486基・道路遺構1条(推定東山道駅路)が確認されている。

大道東遺跡の縄文時代の遺構は、東西2群に分けるこ

とができる。西群は後期前半(称名寺式～堀之内式)、東群は中期後半から後期初頭(加曾利E式～称名寺式)に比定される。(岩崎(編)2009、新井(編)2010a・2010b)

②石製品(No.560)の概要

では、当該遺物について、発掘調査報告書はどのように記載しているかを確認することとする。長くなるが、関係箇所を引用する。なお、文中に560とあるのが当該遺物である。

○560は、礫周縁・中央部に浅い溝がめぐり、全体として馬蹄形状の中高部が形成されている。このほか、敲打は右側面にも及んでおり、ある程度形状を整える意図も感じ取れる。背面側・中高部は礫面か摩耗面か明確ではなく、礫面と見る見解と摩耗面と見る見解に分かれそうだが、印象としては摩耗しているように見える。裏面側には孔5があるほか、打痕がある。断面形状は略楕円というものであるが、その設置率は低く、安定性にかける。裏面側下端の孔周辺は平滑であり、摩耗(拓本の濃い部分)しているように見える。古代219土坑出土。17380g。(岩崎(編)2009、pp.141)

(註4)

○石製品(560)は、219土坑に出土した。土坑上面で7

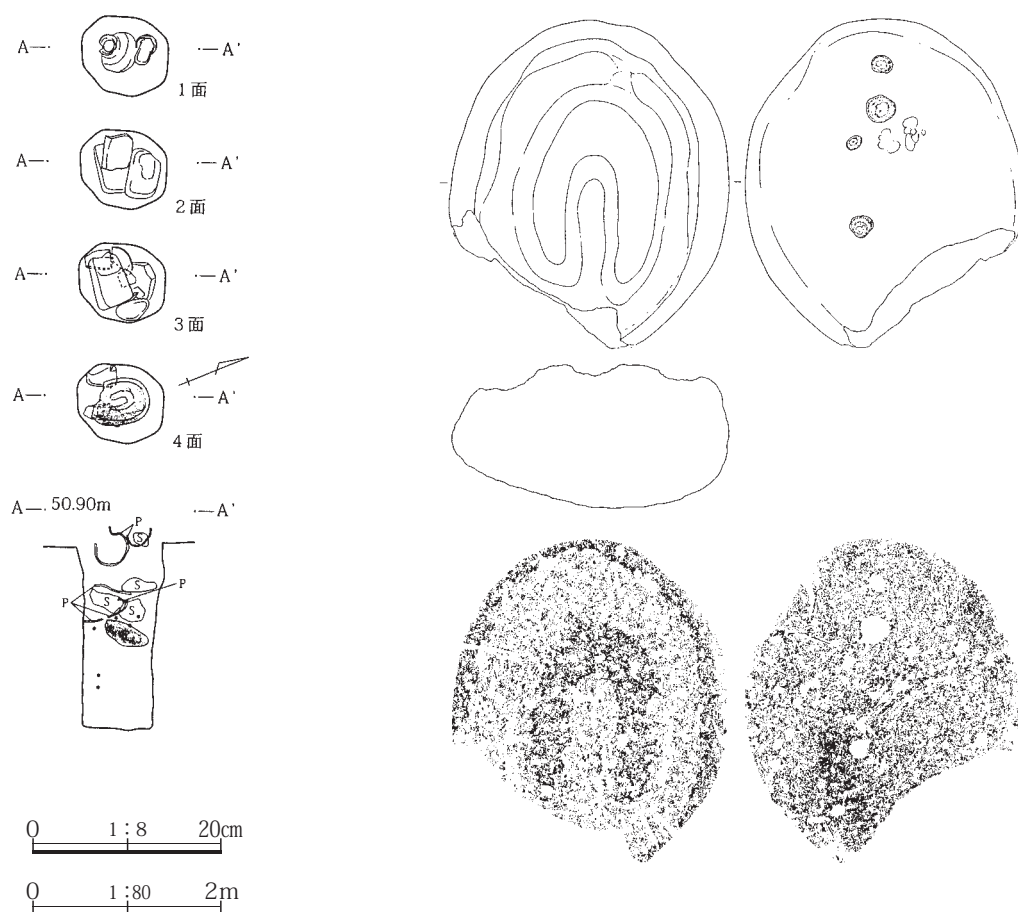


図2 大道東遺跡遺物包含層出土石製品(No560) (新井(編) 2010a・岩崎(編) 2009を一部加工)

世紀代の須恵器壺・土師器鉢が完形で出土、土坑中位で多孔石2・石製品1が出土した。もう少し詳しく言えば、土坑中位の多孔石2点(第124図546・547[省略])の上下には土師器甕の破片が挟み込まれ、その直下に石製品が出土(写真7～9[省略])したということである。意図的埋没が想定されることになるが、実態は明らかでない。土坑のサイズは径0.5m・深さ1.5mを測り、出土状況は祭祀的であるが、サイズの的には柱穴に近い。

出土地点は埋甕と柱穴から推定復元した73号住居[称名寺1式]のプラン内にあり、土坑の所属時期が懸念されることになるが、上記した通り土師器・須恵器の出土状態から、それ自体は7世紀代の所産と見て間違いないだろう。次に、石製品の時期が問題になるだろうが、これについては先に述べたように、石皿未製品類に相似する打痕が礫の周縁にあり、技術的系譜から縄文期の所産として問題ないものと考えている。(岩崎(編)2009、pp.162)

○560の出土した219土坑は73住居のプラン内にあり、

本来的には73住居に帰属したものとするのが妥当である。(岩崎(編)2009、pp.164)

○560について呪術具として捉える見解と、石皿の未製品と捉える見解がある。前者は馬蹄形中高部のそれを女性器と見る立場であり、また、後者は残る8点の打痕の在り方から石皿の未製品として考え、中高部平坦面を礫面と理解、最終的には大きく打撃して石皿の凹面を作出するとする。

筆者[岩崎]が抱いた最初の印象は、平坦面は摩耗面であるというものであったが、顕微鏡観察による確認の必要性を感じた。…摩耗面と見た中高部平坦面は礫面より新鮮で、摩耗面であるというより整形面(560)とすべき…。(岩崎(編)2009、pp.164)

また、発掘調査報告書では、当該遺物を含めた石製品9点について、考察しており(前出引用文の一部も含む)、その結論を以下に引用する。

○不明石製品9点が石皿の未製品か呪術具か、という

視点で検討した。初期の印象はそのまま加工が進めば石皿(561 [省略])になるものもあるが、明らかに呪術的であるというもの(560)もあるという印象であった。…現時点では未製品であるという概念を取り払い、完成状態とすべきだろうと思慮している。すなわち、周縁部敲打は、石皿のリード線あるいは設計線であるという位置づけは変わらないが、それは石皿を簡便に表現(簡略化)したものであり、呪術具として存在した…。馬蹄形中高部を有するそれについては、直感的に「中高石皿」を類似資料とすることも想定してみたが、その系譜を辿れず宙に浮いている。現状では、先行形態の見当さえつかない状況である。(岩崎(編) 2009、pp.169)

当該遺物等の性格について見ると、報告書は「周縁部敲打は、石皿のリード線あるいは設計線であるという位置づけは変わらないが、それは石皿を簡便に表現(簡略化)したもの」(岩崎(編) 2009、pp.169)など、縁は「石皿の機能の象徴化」(田村2000、pp.49)であるとした筆者の従来の見解と基本的に合致するが、器種としては石皿から分離し「石製品」とする点において異なる。詳しくは3.分類に記すが、筆者はこのような遺物を第二の道具としての意味が強調された(あるいは「第二の道具」としての意味のみの)石皿であると考えている。

3. 分類

再検討を行うにあたり、石皿の形態分類を掲げ、その変遷について以下に概略を記す。当該石皿については、これを基き分類を行うこととする。

【石皿形態分類】

I 類 縁の形成が見られない

a 平坦な作業面を有する

b 浅く凹む作業面を有する

II 類 縁の形成が見られる

a 平坦な作業面を有し、縁の形成が見られる

b 浅く凹む作業面を有し、ゆるやかに立ち上がる縁の形成が見られる

c 溝状に凹む作業面を有する

III 類 縁および作業面中央部の島状の高まりの形成が見られる(田村2013a・2014) (註5)

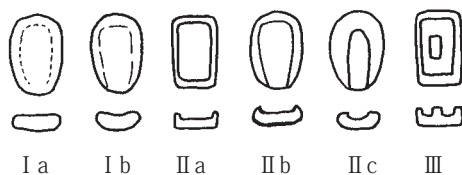


図3 石皿の形態

これら各形態の出現順は、I a類・I b類→II b類・II a類→II c類→III類であり、弥生時代以降にII類・III類は姿を消す(註6)。III類は東北地方の縄文時代後期に特徴的なものである(大野1916、安達1983、田村2000・2001・2010・2013a・2014、上條2007など)。

伊勢崎市(旧佐波郡東村)下田遺跡I区3号住居跡出土石皿(Na15)について見ると、下田遺跡I区3号住居跡は、前記のように中期後半から後期初頭(加曾利E IV式～称名寺1式)に位置づけられ、当該石皿も住居跡に伴うものであり、同様の時期の所産と考えられる。また、同遺構のみならず下田遺跡からは、後期の東北系の遺物は出土していない。これらのことから、当該石皿はIII類に分類されるが、東北地方の影響を受けたものと解釈することは難しい。

太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品(Na560)はその名の示すように発掘調査報告書では石皿ではなく石製品とされるが、その形態は作業面中央に高まりの形成の見られるIII類の石皿に相当し、かつII b類作業面上に小さなII c類を配したかのごとき(もしくは二重の縁をもつII c類のごとき)様相をも呈している。なお、II c類は中部・関東地方の前期後半から中期に多く見られる形態である(田村2000・2001・2010・2013a・2014)。

II・III類に見られる縁の形成は、前記の石皿各形態の出現順からして「石皿の機能の象徴化」(田村2000、pp.49)であり、その確立をもって「第二の道具」としての石皿のあり方(非実用的(呪術的、儀礼的))を視覚的にとらえることが可能になったと考えられる。すなわち、「第二の道具」としての石皿はII類の確立以前にも存在するが(鈴木1991など)、それはI類の中に出現し「第一の道具」としてのあり方(実用的)と共存してきたものであり、明確な縁を有するII・III類こそが「第二の道具」としての石皿のあり方を示す形態であると言える。無論、II・III類における「第一の道具」としてのあり方を否定するものではない(註7)。このような視点に立つと、当該遺物における作業面上の高まりは、時期的にやや遅れるもののその形態からII c類にその起源を求めることができるのではないであろうか。よって、当該遺物は石製品ではなく石皿であり、III類に分類されるものである(註8)。

下田遺跡I区3号住居跡出土石皿(Na15)と大道東遺跡遺物包含層出土石製品改め石皿(Na560)は、その系譜が同じであるか明確ではないが、前記のように同じくIII類に分類される。

4. 類似する石製品

「第二の道具」としての石皿について考えるにおいて、縁により象徴化された機能(粉化、磨り潰し等)に関する儀礼等は想定されるにしても、下田遺跡I区3号住居跡出土石皿(Na15)と大道東遺跡遺物包含層出土石製品改

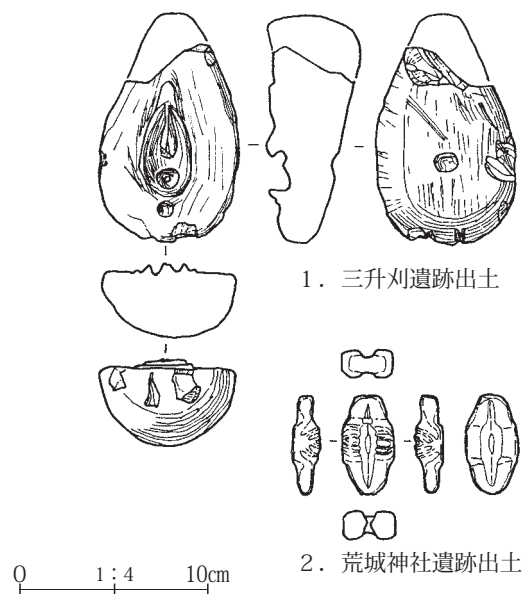


図4 三升刈遺跡出土ホト形石製品および荒城神社遺跡包含層出土ほと石(春成1996、渡辺(編)1993を再トレース)

め石皿(No.560)の両石皿とも女性(または女性器)の意味を持つことが指摘されていること(岩崎(編)2009、関根2014)は見逃せない。縄文時代における女性器を表す石器・石製品といえば、秋田県由利本荘市(旧由利郡東由利町)三升刈遺跡出土(表面採取)の晩期頃と推定される凝灰岩製のホト形石製品〔女性器形石製品〕(春成1996)および岐阜県高山市(旧吉城郡国府町)荒城神社遺跡包含層出土の後期の流紋岩製のほと石(陰石)〔女性器形石製品〕(渡辺(編)1993)である^(註9)。

特に、三升刈遺跡出土ホト形石製品は、その名の示すようにきわめて具体的に女性器を表しており、「水滴状の尖った一端が欠損しているが、…小陰唇、陰核、外尿道口、膣入口から肛門まで立体的に彫刻したもので、ホト〔女性器〕を単独に表現したものとしては、縄文時代にはこれほど見事な造形品は他にない」(春成1996、pp.84)と評価されている。これに比べると、下田遺跡Ⅰ区3号住居跡出土石皿(No.15)と大道東遺跡遺物包含層出土石製品改め石皿(No.560)とも具体的表現に乏しく、明らかに大きさが異なる。しかし、その楕円形内に凹凸ある構造物を配置する平面形(上面)、端部(掃き出し口側)が上がる断面形から受ける印象は類似しており、かつ、端部(掃き出し口側)が欠損していることなど、その形態の示す全体像に大きな差異はない^(註10)と言えるのではない。地理的・時期的にも離れた遺物であり、互いに直接的な影響を与えた可能性はないが、このような形態の示す全体像から、共通の意味および儀礼の存在が考えられる。すなわち、前記のように女性(女性器)である。

石皿を女性(女性器)とする考え方については、古くは鳥居龍藏により唱えられ(鳥居1924)^(註11)、近年のものとしては大島直行の論がある(大島2014)^(註12)。一方、これを否定する考えもまた古くから存在する(中谷1929など)。しかし、石皿が石棒と共伴関係をもち性的な象徴性が見られることなどからも^(註13)、やはり石皿には女性(女性器)としての意味をもつものが存在すると考えることは妥当である。加えて、女性器またはその造形物等の呪力については、日本国内のみならず世界各地のさまざまな時代さまざまな文化においてそれを表現する事例が確認されており^(註14)、「第二の道具」としての石皿にも女性(女性器)の呪力を期待されたことが十分に考えられるのである。

とはいえ、前記のように当該3遺物の間には地理的・時期的な空白があり、この点において類似性についての論拠は極めて脆弱である。続けて論じた女性(女性器)の意味を持つことや女性器の呪力の問題に関してはあくまで一般論にすぎず、下田遺跡Ⅰ区3号住居跡出土石皿(No.15)および大道東遺跡遺物包含層出土石製品改め石皿(No.560)についてはその可能性を指摘するに止めざるをえない。

おわりに

以上、伊勢崎市(旧佐波郡東村)下田遺跡Ⅰ区3号住居跡出土石皿(No.15)および太田市大道東遺跡遺物包含層出土石製品改め石皿(No.560)について再検討を行った。その結果、ともに縄文時代中期末～後期初頭の石皿でありⅢ類に分類され、秋田県由利本荘市(旧由利郡東由利町)三升刈遺跡出土ホト形石製品と比較し「第二の道具」として女性(女性器)を示すものである可能性が指摘された。しかし、周辺地域に類例がなく、これが研究を進める上での障害となり、屋上屋を重ねるが如き論になってしまった感は否めない。今後、類例の増えることを期待したい。また、石皿の「第二の道具」としての側面については、今回検討した他にも、考えなければならないものが多々あることは言を俟たない。改めて取り組みたい課題である。

本稿においては、先学諸兄の敬称を略させていただきました。何卒、ご容赦頂きたい次第であります。また、執筆にあたり以下の方々に指導・助言をいただきました。記して感謝いたします。

岩崎泰一、関根慎二、高島英之、津島秀章、矢口裕之

註

(註1) 石皿の分類については3. 分類を参照のこと。

(註2) 阿部2015は、「第一の道具」と「第二の道具」の「両方の性格を有するもの」について「第一の機能」と「第二の機能」に整理できるとして

- いる(pp.131-132)。よく整理された概念ではあるが、筆者はこれまで「第一の道具としての側面」と「第二の道具としての側面」を用いてきたので、本稿でもこれを用いることとする。
- (註3) 以下、本文(引用文ふくむ)・註とも遺構・遺物の名称は発掘調査報告書により、「…」は省略を表し、[]内は筆者による加筆・補足である。
- (註4) 引用文にあるように、当該遺物は、実際には219号土坑から出土している。
- (註5) 田村2000・2001・2010を改訂した。
- (註6) 浜田1992・2007。田村2003・2013a。但し、東京都三宅村からⅡc類が1点出土している。
- (註7) 田村2000・2002の以下の論による。「Ⅰ型[Ⅰ類に読替え、以下同じ]は、縄文時代全般を通じて観察された。これは、Ⅰ型の持続性を示すものであり、また、縄文時代を通じての石皿の重要性を示すものである。これに対しⅡ型[Ⅱ類に読替え、以下同じ]は…限られた時期的様相を呈している。これは、Ⅰ型とⅡ型の用途の差、あるいは縄文文化における位置づけの違いによると考えられる。すなわち、実用的なⅠ型と、非実用的な(第二の道具としての)Ⅱ型という構図である。Ⅱ型はⅠ型に比べ使用された痕跡の少ないものが多い。…Ⅱ型で強調される縁は、石皿の機能の象徴化であろうか」(田村2000、pp.48-49)。Ⅰ類とⅡ類の「このような差異は、磨り潰す対象の差によるものもあるだろうとも推察され…しかし、後期以降にⅡ類の出土量が減少し、晩期限りで姿を消す」ことや「付着物の問題をあわせて考えると、Ⅰ類とⅡ類との縄文文化における位置づけの違いを示す」と考えられる。「すなわち、実用的なⅠ類と非実用的な(第二の道具としての)性格と強いⅡ類」である(田村2002、pp.8)。
- (註8) なお、当該遺物以外の石製品8点については、岩崎(編)2009(pp.169)にもあるように、「周縁部敲打は、石皿のリード線あるいは設計線」であるならば、やはり石皿と考えるべきであり、「周縁部敲打」により導かれる縁の形成から、Ⅱ類が妥当である。
- (註9) この他、宮野淳一は、秋田県大仙市(旧仙北郡協和町)上ノ山Ⅱ遺跡遺構外出土石製品(Na1048)(高橋(編)1988)を女性器形石製品とするが(宮野1998)、同遺跡出土の他の遺物と比較すると、玦状耳飾の未製品と類似しており、こちらの方が妥当ではないかと考えられる。なお、女性器を単体で直接的に表現した遺物は少なく、石器・石製品としては本文中の遺物の他は弥生時代の大府東大阪市瓜生堂遺跡出土女性器形石製品(川村2002)、鹿児島県肝属郡錦江町(旧大根占町)山ノ口遺跡出土女性器形石製品(金関1975)が知られている(三角形石製品、岩版、および女性器を石棒・石冠などの一部に表現した「交合形」(春成1996)をのぞく、(註13)も参照のこと)。男性器を単体で直接的に表現した石棒の出土量とは、比べるまでもない。
- (註10) 欠損部位が共通することは、平出一治によれば、共通の廃棄行為が想定されうる(平出1978)。なお、荒城神社遺跡包含層出土ほと石(陰石)との間にはこのような共通点は見出せなかった。今後の検討課題である。
- (註11) 石皿を女性(女性器)とし、石棒を男性(男性器)として対をなすとする、所謂、陰陽二形説のこと。なお、石棒を男性(男性器)とする考え方はこれよりも約30年早く、大野延太郎により唱えられている(大野1896)。
- (註12) 石皿・磨石について「基本的には製粉道具や肉の加工用道具と

- して使われたとは思いますが、それ以上にこの道具には、何かのシンボルズムにかかわる呪術的な役割もあったのではないのでしょうか。私はそれはもちろん月であり、蛇と子宮であったのではないか」(pp.123)としており、「第二の道具」としての側面を強調しすぎている感がある。また、地理的・時期的な視点に欠けるところがある。続く大島2016では全編にわたりこの傾向が強く、かつ恣意的な解釈も著しい。「私の言説が恣意的に見えるのは、私が恣意的に解釈しているからではなく、縄文人の思考のあり方が恣意的だからなのです」(pp.253-254)。
- (註13) 高山1974、鈴木1991、戸田1995、谷口2006など。鳥居1924は裏面に石棒の彫刻された石皿を、中村1966は体部に石皿状の加工のある「石皿と石棒の兼用物」を紹介している。
- (註14) 例えば、中山1926、西岡1956、倉石1990・2005・2013a・2013b、佐藤1995、田中1997、デュル(藤代・津山訳)1997、ブラックリッジ(藤田訳)2005など。なお、倉石忠彦は、性器(男性器・女性器ともにではあるが)とその呪力について民俗例から、「性器に対する認識には、①肉体の部位、②性差を示す部位、③生殖機能、④性の根源的・象徴的存在、⑤開く機能、⑥除災[魔除・厄除]の機能、に加えて、⑦性的快楽にかかわる機能を認めることができる。そして性器形態物を報賽とする際に期待される効験には、①病氣平癒、②子授け、③安産、④縁結び、⑤夫婦円満、⑥五穀豊穡、⑦家運繁盛、⑧遊郭守護、⑨怨霊鎮護、⑩下の世話、⑪旅行安全という11種を見出すことができる」(倉石2013a、pp.243)としている。

引用・参考文献

- 安達厚三1983「石皿」『縄文文化の研究』第7巻(道具と技術) 雄山閣 pp.129-139
- 阿部昭典2015『縄文の儀器と世界観—社会変動期における精神文化の様相—』 知泉書館
- 新井仁(編)2010a『大道東遺跡(2)—弥生時代以降編1—』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新井仁(編)2010b『大道東遺跡(3)—弥生時代以降編2—』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岩崎泰一(編)2009『大道東遺跡(1)—縄文時代編—』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大島直行2014『月と蛇と縄文人—シンボルズムとレトリックで読み解く神話的世界観—』 寿邦社
- 大島直行2016『縄文人の世界観』 国書刊行会
- 大野延太郎1896「常陸國霞力浦沿岸旅行談」『東京人類學會雜誌』第11巻 第123号 東京人類學會 pp.352-353
- 大野雲外(延太郎)1916「石皿の形式分類」『人類學雜誌』第31巻第8号 東京人類學會 pp.272-273
- 金関恕1975「弥生人の精神生活」『古代史発掘』第4巻(稲作の始まり) 講談社 pp.80-86
- 上條信彦2007「石皿と磨石」『縄文時代の考古学』第7巻(なりわい) 同成社 pp.110-125
- 上條信彦2015『縄文時代における脱穀・粉碎技術の研究』 六一書房
- 川村邦光2002「弥生時代の性と祭儀」『AERA Mook 古代史がわかる。』 朝日新聞社 pp.78-80
- 倉石忠彦1990『道祖神信仰論』 名著出版
- 倉石忠彦2005『道祖神信仰の形成と展開』 大河書房

倉石忠彦2013a『身体伝承論—手指と性器の民俗—』 岩田書院
 倉石忠彦2013b『道祖神と性器形態神』 岩田書院
 小林達雄1977『土偶』『日本陶磁全集』第3巻(土偶・埴輪) 中央公論社 pp.45-53
 小林達雄1996『縄文人の世界』 朝日新聞社(朝日選書)
 小林達雄2008『縄文の思考』 筑摩書房(ちくま新書)
 小林徹2008『下田遺跡(2)』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 佐藤哲郎1995『性器信仰の系譜』 三一書房
 鈴木保彦1991『第二の道具としての石皿』『縄文時代』第2号 縄文時代文化研究会 pp.15-39
 関根慎二2014『縄文時代の石製儀礼具について—孔をもつ石皿を中心に—』『研究紀要』32 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.9-20
 高橋忠彦(編)1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ—上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—』下 秋田県教育委員会
 高山純1974『配石遺構についての若干の考察』『大磯・石神台配石遺構群発掘調査報告書』 大磯町教育委員会 pp.50-73
 田中貴子1997『性愛の日本中世』 洋泉社
 谷口康浩2006『石棒と石皿—象徴的生殖行為のコンテクスト—』『考古学』Ⅳ 安斎正人 pp.77-102
 田村博2000『石皿考—石皿分類私案—』『多摩考古』第30号 多摩考古学研究会 pp.45-51
 田村博2001『石皿・磨石の組み合わせについて』『利根川』22 利根川同人 pp.43-47
 田村博2002『縄文時代における石皿の利用と廃棄—群馬県東部地域における石皿の利用のあり方について—』『中央史学』第25号 中央史学会 pp.1-15
 田村博2003『群馬県における弥生時代の石皿』『利根川』24・25 利根川同人 pp.366-371
 田村博2008『石皿と臼—堅果類の粉化・搗碎・磨り潰し具の問題—』『白門考古論叢Ⅱ—中央大学考古学研究会40周年記念論文集—』 中央考古会・中央大学考古学研究会 pp.29-36
 田村博2010『石皿の縁について—研究史と課題—』『利根川』32 利根川同人 pp.34-39
 田村博2013a『ふたたび石皿の縁について—石皿分類私案の改訂—』『利根川』35 利根川同人 pp.22-24
 田村博2013b『弥生時代以降の石皿について—群馬県の例から—』『白門考古論叢Ⅲ—中央大学考古学研究会45周年記念論文集—』 中央考古会・中央大学考古学研究会 pp.55-66

田村博2014『石皿の縁と色—第二の道具として—』『考古学の窓』3 國學院大學卒業生in群馬 pp.15-18
 デュル, ハンス・ペーター (藤代幸一・津山拓也訳)1997『性と暴力の文化史—文明化の過程の神話Ⅲ—』 法政大学出版局(原著Hans Peter Duerr 1993 “Obszönität und Gewalt Der Mythos vom Zivilisationsprozeß”)
 戸田哲也1995『石棒出土の具体例』『飛騨みやがわシンポジウム石棒の謎をさぐる』 宮川村教育委員会 pp.58-85
 鳥居龍蔵1924『諏訪史』第1巻 信濃教育會諏訪部會
 中島将太2008『石皿に関わる儀礼行為』『月刊考古学ジャーナル』№578 ニュー・サイエンス社 pp.14-18
 中村孝三郎1966『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館
 中森敏晴1996『“定形石皿”論—もうひとつの石皿—』『考古学雑渉—西野元先生退官記念論文集—』 西野元先生退官記念会 pp.109-124
 中谷治宇二郎1929『日本石器時代提要』 岡書院
 中山太郎1926『性に関する迷信』『土俗私考』 坂本書店(再録2007『タブーに挑む民俗学—中山太郎土俗学エッセイ集成—』 河出書房新社)
 西岡秀雄1956『性神大成—日本における性器崇拜の史的研究—』 妙義出版
 西宮紘1995『縄文のシンボリズムと女たち』『男と女の時空—日本女性史再考—』第1巻(ヒメとヒコの時代) 藤原書店 pp.31-67
 馬場秀明1998『活力と豊穡の信仰』『縄紋の祈り・弥生の心—森の神から稲作の神へ』 大阪府立弥生文化博物館 pp.44-47
 浜田晋介1992『弥生時代の石皿と磨石—南関東地域の事例から—』『考古論叢神奈河』第1集 神奈川県考古学会 pp.56-81
 浜田晋介2007『弥生時代の石皿と磨石・再考—植物加工具としての分析—』『西相模考古』第16号 西相模考古学研究会 pp.23-57
 春成秀爾1996『性象徴の考古学』『国立歴史民俗博物館研究報告』第66集 国立歴史民俗博物館 pp.69-160
 平出一治1978『縄文時代の石皿について—こわれた石皿をめぐって—』『信濃』第30巻4号 信濃史学会 pp.44-52
 ブラックリッジ, キャサリン(藤田真利子訳)2005『ヴァギナー女性器の文化史—』 河出書房新社(原著Catherine Blackledge 2003 “THE STORY OF V—Opening Pandora’s Box”)
 宮野淳一1998『自然と誕生への畏敬』『縄紋の祈り・弥生の心—森の神から稲作の神へ』 大阪府立弥生文化博物館 pp.36-43
 渡辺誠(編)1993『荒城神社遺跡』 (財)岐阜県文化財保護センター